

令和4年度若手技術者・経営者向け実践型 海外派遣プログラム報告書



令和5年1月カンボジア派遣時、ケップ市内廃棄物処理施設の現状を目の当たりにする参加者



公益財団法人福岡県国際交流センター

令和4年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム

研修スケジュール

【事前研修】

日程	内容	場所
2022/10/29 (土)	第1回事前国内研修	こくさいひろば
2022/11/12 (土)	第2回事前国内研修	アクロス福岡会議室
2022/12/17 (土)	第3回事前国内研修	こくさいひろば

【海外派遣（カンボジア）】

日程	内容	宿泊先
2023/1/8 (日)	・ 出国 ・ 現地起業家との交流会	プノンペン
2023/1/9 (月)	・ 廃棄物処理施設視察 ・ マングローブ保護エリア視察 ・ 胡椒農園視察 ・ ケップ市との意見交換会 ・ ウェルカムディナー交流	ケップ
2023/1/10 (火)	・ カンポットフレンチコロニアル建築見学 ・ プレイノップマーケット視察 ・ シアヌークビル市内視察 ・ 新規再定住コミュニティ視察 ・ 線路周辺のインフォーマル居住区訪問	シアヌークビル
2023/1/11 (水)	・ ハビタットカンボジアとシアヌークビル州の 事業報告会参加 ・ シアヌークビル州副知事との意見交換会 ・ シアヌークビル港見学 ・ JICA カンボジア事務所訪問	プノンペン
2023/1/12 (木)	移動	機内
2023/1/13 (金)	帰国	

【事後研修・報告会】

日程	内容	場所
2023/1/21 (土)	事後国内研修	こくさいひろば
2023/2/18 (土)	成果報告会	こくさいひろば

令和4年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム
参加報告書

株式会社 石蔵商店
代表取締役 石蔵義浩

この度は、本プログラムに参加させて頂き誠にありがとうございました。
貴重な経験をさせて頂き、様々な感情を抱き、考えさせられたと同時に、弊社の今後の事業展開、そして自身の未来の構想に対しての大きなターニングポイントとなりました。下記にて報告書として、本プログラムとして学び得たことを纏めさせていただきます。

<国内事前研修>

渡航前に計3回的事前研修があり、そこで「カンボジアという国、社会課題、問題とは」「現在進んでいる国際協力事業とは」などを整理し、既存の海外進出事例を学ぶところからのスタートであったので、事前準備が確りできたのは良かったと思います。また、今回はチーム編成での事業構想という形式であったため、事前にチームで構想案を練るタイミングで、一人では見落としそうなポイントへの気付きや、密なコミュニケーションによるリレーション構築ができ、実際の現地訪問での気付きのシェアなどもスムーズ且つ深掘するコミュニケーションを円滑にとることができ、現地視察の濃度が上がったと思います。非常にいい事前研修でした。

<現地視察>

初日のプノンペンにて、既に現地カンボジアにて事業展開を行っている方々とお会いし、「我々も何かできるはず！」という大きな刺激を受けて視察スタートを切れたことも、スケジュールとして非常に良かったです。そして、ケップ、プレイノップ、シアヌークビルを訪問し、実際の国連ハビタットの事業を見学することができ、まさに「今」の社会課題・問題を目の当たりにすることができました。我々が事前研修で想定していたような「課題⇒仮説⇒ビジネスで解決」という簡単なロジックには当てはまらず、容易にクリアできる問題は一つもなく、良い意味での「大きな壁」を感じたことも「現地へ訪問したからこそその気付き」であり大きな学びとなりました。中でも一番の気づきは、社会課題解決型事業（ソーシャルビジネス）とは、我々日本の民間企業だけで進めるのではなく、カンボジア政府（行政/自治体）や、現地の方々の理解・協力が必ず必要で、三位一体となって進めていくことが必ず必要であるということです。そのためには、情のような自身の感情を一旦抑えた「冷静且つ客観的な分析」も必要であり、現地の方々と同じ目線に立ち、向かい合うという姿勢も必要であると感じました。

<国内事後研修>

帰国後、我々チームが事前に想定していた3つの事業構想案を、実際の現地視察の情報収集を踏まえて一つに絞っていく作業の中で、直接コミュニティの方々や現地副州知事からも話が聞けた「シアヌークビル州」での事業展開を主軸に深堀をしていきました。（経済発展・気候変動対応・持続可能なコミュニティ形成を軸とした「自家発電工場による工業製品（遮熱材製造）ファクトリーの建設」という構想を展開。内容は、先日の報告会通り）

この事後研修では一番の気付きは、「事前研修で議論していたことはあくまで可能性の話」であるということ、現地に実際に足を運ばないとわからない「情報」や「体感」があり、それこそが生きた情報として非常に大切であると感じました。また、構想を練る過程で思ったことは、実際に事業展開をする際はまだまだ細かい課題もあり、一人（一社）の単独では決して実現することは難しく、いかにして事業パートナーを巻き込んで共に事業展開していくかがポイントであるということも強く感じました。

<まとめ>

本プログラムに参加して、上記通りたくさんの学び・気付きがありました。その中で、一番大きな成果は「いつか必ずカンボジアに再訪し、ビジネスを通して彼らの社会課題を解決したい!」という「覚悟」を持つことができたことです。それだけ「現地に実際に行く」ということのインパクトは大きく、実際の「体感」はとても凄いものがありました。この気持ちを忘れることなく、早いタイミングでまずは実際の「事業展開ロードマップ」を引き具体的に進めていければと思います。

最後に、本プログラムに関わって頂いた福岡県国際政策課、国連ハビタット、国際交流センターを含めた関係各社の皆様、本当にありがとうございました。我々もこの経験を活かし、日々邁進していきますので、今後ともご支援をどうぞよろしくお願い致します。

以上

令和4年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラムを経験して

九州大学大学院工学府 石橋文也

改めまして、この度令和4年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラムに参加させていただき誠にありがとうございました。プログラムを通して感じたこと、学んだことを4つの項目に分けて記述します。

○課題解決×ビジネスの視点

初めて主催者・参加者が集まった10月29日、私は参加者の中で学生が私と森さんのみであり、他の参加者が社会人の方々であることに委縮したことを覚えています。そして、社会人の方々は技術者というよりは経営者と呼ぶに相応しい方々であり、ビジネスの経験がない私はこれからのグループワークについていけるか不安でした。不安は現実となり、初日のグループワークでは「ビジネスの経験がないから」と枕詞をつけて発言する機会が多く、出せる発想も課題解決の視点でしか考えることができませんでした。初日の終わりに白砂さんから「次回以降から学生だから、はなしだね。」と厳しく言っていただいたことを鮮明に覚えています。私はこれまで、課題解決という目標さえ達成できれば良いという考えのもと、提案事業のコスト面や持続性に目を向けてきませんでした。しかし、今後民間企業で働く際に必ず利益を含めたビジネス性を考える必要があると思います。今回の経験で、最終的にビジネス化実証事業とするための提案をチームでできたことが私の財産となりました。

○初の海外経験、そしてカンボジアの現状

私は今回の渡航が人生で初めての海外渡航でした。出発前は期待と不安が入り混じった心境でしたが、熊川さんをはじめ多くの方々にサポートしていただき、一生忘れることのない初海外になったと断言できます。私はこれまで「海外の課題解決がしたい」や「海外の人々の生活を支えたい」等の言葉を面接や論文執筆の際に使ってきました。しかし、その言葉を使うたびに海外経験もなく説得力に欠けることを感じては虚しい気持ちになりました。そこで今回の案内をいただき、海外、特に東南アジアという廃棄物を専門とする私にとって将来活躍の可能性がある場所でのプログラムだと考え、応募させていただきました。実際にカンボジアを視察して感じたことは都市と地方の格差です。経済、生活水準、人、廃棄物とどれをとっても日本のそれ以上の差があったように思えます。都市の生活に関しては、視察前に抱いていたイメージよりも発展していて豊かに感じました。しかし、2日目にケップに移動する際にプノンペンを出た瞬間に雰囲気の変化を感じ、バスの移動中は常に道路沿いのごみを眺めながら移動していました。処分場を訪れた際も、箱物としては立派な処分場なのに管理者がいないオープンダンピング状態であり、一時的な支援ではなく、運営までを含めた継続的な支援が必要であると考えました。

○専門分野の知識の深まり

私はこれまで廃棄物を専門としてきましたが、このプログラムを通してより知識や理解が深まりました。特に東南アジアにおけるごみの組成、発生量、排出源からごみの収集や処理の実態を知ることができました。最も参考になったことは、カンボジアにおけるごみ収集と処理の実態を確認できたことです。まず収集に関しては、ケップ州は1日25トンのごみが発生していると想定される中で14トンほどしか収集できていないと分かりました。また、ごみの分別に関しても可燃ごみと不燃ごみに分けている家庭もあるが、トラックで収集する際に1つにまとめられている様子でした。シアヌークビルでは可燃ごみと別に缶類を分別収集している様子を確認することができました。ごみの処理に関しては、中間処理は基本無く処分場にそのまま埋め立てられる様子を確認できました。中間処理施設を導入するには少し時間がかかると感じました。これらごみ処理の実態を確認できたことは、今後国内・海外で廃棄物の専門家として活躍していくための貴重な経験になったと断言できます。最終報告会で白砂社長や島岡教授からご指導いただいたように、表に出ているデータの信憑性を確認し、全体を細かく把握した上で課題や解決策を考えていく必要があることを学びました。

○人とのつながり

このプログラムに参加して最も良かったと思えることは、国連ハビタット、福岡県、JICA、講師、参加者の皆様とのつながりができたことです。学生として普通に生活をしていればお会いすることができない方々と同じ時間を過ごせたことは一生の宝物になりました。プログラム初日は年齢も離れている方が多く委縮してしまうこともありましたが、学生の私にも対等に接していただいたことで参加者の1人であるという自覚が芽生え、それ以降は学生であることを意識せずに積極的に発言できるようになったと思います。またいつの日か皆様とお会いできた際には、一回りも二回りも成長した姿をお見せできるように日々精進したいと思います。改めまして、この度はプログラムに参加させていただき、また多くのご支援を賜りまして本当にありがとうございました。またいつか皆様とお会いできることを楽しみにしております。

カンボジア研修の報告

エコステージエンジニアリング株式会社

中園 大樹

私がこのカンボジア派遣プログラムに参加したのは、弊社社長から紹介を受け、将来的に油温減圧乾燥装置（以後クッカーと表記）を海外展開していく上で視察もかねてこの企画に参加してはどうかというお話を持ち掛けられたのがきっかけであった。そして個人的には、弊社の持つ特許技術がカンボジアのような未知の国においてどの程度需要があるのかを知る必要を感じるためである。

カンボジアに渡航する前の事前国内研修にて、他メンバーの皆様や講師の皆様と協議し、ビジネスの観点から弊社の製品であるクッカーをカンボジアのケップ市に設置し、それを稼働させる際に必要な太陽光発電システムの設置を目的とした事業計画を策定し、それによる雇用機会の創出や廃棄物削減といったシミュレーションも行いカンボジアでの視察に備えた。

カンボジアに赴いた際、ケップ市の廃棄物処理場を視察する機会があり、そこでは工場や設備はなく、更にはクッカーに類似する廃棄物を処理し有価物に変えるような装置の存在も無く、市内のゴミを集めてはただ野焼きにするような状況であったため、クッカーを稼働するためのベースも無ければ方法も知らない故に同装置の設置は非常に困難であることが分かった。そもそも、ケップ市が財政的にクッカー導入費や工事費を払えるかが懐疑的である。

私は上記のケップ市の問題を解決するために、先日の報告会で述べた通り、本計画をJICA 普及実証事業案件化調査として提案し、採択された暁にはカンボジア国の上層部と掛け合い、ケップ市を廃棄物処理に特化した市にさせることを目的とした計画を立てることとした。カンボジアで廃棄物を価値あるものに変える&適切な場所と方法で捨てるという習慣を身につかせるには途方もない時間がかかるような気がしてならない。故に外国の者によるアプローチが必要であり、その役目を担うのが我々の責務ではないかと考える。

このプログラムで実感したことは、海外で事業を取り組むことは日本とは環境も文化も法整備も異なることもあり非常に困難を極めるとのことだ。しかし、私がもし将来に会社経営をする立場になった場合、弊社の業界の性質上日本国内での経営には限界があるため海外展開は避けて通れない道だと確信している。そんな中でカンボジアに踏み入って現地の人々とヒアリングしたり議論したり、時には難題に頭を悩ませたりといった経験は間違いなく私の経験となった。

そして、報告会では事業計画の趣旨とかけ離れているため発表できなかったが、個人的にはカンボジア（プノンペン）に進出している日本の大企業である A 社と協力しクッカーを導入してもらい、モデルを作るという策を考えている。（A 社は過去にテレビ会議にて弊社のクッカーについてお問い合わせあり）カンボジアでクッカーの設置実績を作るなら SDG s や廃棄物処理を熟知している日本企業と組むのは有効な策だと考える。

カンボジアに至っては、競合他社が存在しないことが分かった点は収穫であり、栄養ある食品廃棄物がリサイクルされないまま捨てるしかないという状況はポジティブに考えれば弊社にとってのビジネスチャンスであると言える。

このプログラムに参加して、対象国がカンボジアであったことは海外展開を考える私にはうってつけの機会であったしいい経験となった。

今後はカンボジアで事業を始めることを視野に入れ、邁進したいと思う。

令和4年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム報告書

株式会社アグリツリー

西 光司

この度は本プログラムに採択いただき、関係各所のみなさまには心より御礼申し上げます。応募時点で「概ね35歳以下」を大幅に上回っていたので厳しいだろうと思っていましたが、採択され、自身がチームメンバーの中で最年長だったこともあり、チームに何が貢献できるかについて考えることからプログラム初日が始まりました。

【事前研修】

事前研修の講義においては、国際協力についての講義、国連ハビタットの活動が印象深かった。これまでに国際協力について学ぶ機会がなかったためにSDGsの成り立ちや日本企業の関与については今後の事業活動にも大いに生かせるものであった。MDGsからSDGsになったことで企業が取り組みやすくなったことについてデザインの力を感じた。日本が人権に対する意識が低く、環境に対する意識が高いことについては歴史も大きく影響しているのではないだろうか。人口減少が進む日本で人権に対する意識を高め、ジェンダー平等の姿勢を強めていくことは企業にとって強みになると同時に、移行できない企業は淘汰されていく程のインパクトがあるだろう。

国連に数多くの機関があり、それぞれが担当のSDGsを持っていることは知らなかった。国連ハビタットの担当は「11.住み続けられるまちづくりを」である。弊社も自然エネルギーと農業という社会インフラに関わる事業をしているので、20軒程度の住居を配電線で連係し、そのエネルギーを自然エネルギーだけで賄えるようなシステムを構築してみたいと感じた。そのシステムは将来的に日本の過疎地にも適用できる逆輸入システムとしても大いに活用できると思う。「複合的な問題が最も立場の弱い人たちに重くのしかかる」という言葉は印象的で、根本の課題がどこにあるのかと考えを巡らせ、地球規模で考えると戦争や貧困問題、気候変動も、人類が地球で生かされていることから自然の営みの中で発生しているのではないかとさえ思えてしまった。仮にそうであったとしても、子供や孫の世代により良い社会システムを残していくことは、我々の責務であることに間違いはない。

事前研修で開始されたメンバーでのワークにおいては、年長者であることから主張を抑えるように努めた。日頃は、組織の長として前面に立って引っ張っているつもりであるが、一歩引いてメンバーの意見を引き出すことに注力すると、バックグラウンドの異なるメンバーから様々な知識や意見を聞くことができた。この経験は組織に戻ってからも生きており、意図的にメンバーの意見を収集することにつながっている。「素直な心で衆知を集める」組織の長としての役割をしっかりと果しながらも、チームメンバー1

人1人の個性をしっかりと引き出す組織運営を実践していきたい。

【実地研修】

カンボジアへの渡航は初めてで、本プロジェクトでないといけない場所や会えない方々とお会いすることができ、大変得難い経験となった。国土に張り巡らされていない電力網と相対的な電気料金の高さは産業の発展を妨げていると感じたが、整備されていないことによって、自然エネルギーとバッテリーを中心とした自律分散型の電力網を構築することが先進国より実施しやすいのではないかと感じた。豊かな土壌と温暖な気候、少ない災害、明るい人々ととても魅力的な国であった。弊社のリソースを考えるとすぐに事業を開始することはできないが、遠くない将来にカンボジアでの事業化を実現し、本プログラム関係各所のみなさまにご報告できるように努めていきたい。

以上

カンボジア派遣プログラム 報告書

～カンボジアを視察して得られたことと今後のビジネスの可能性について～

株式会社ティーティーエス企画 野見山宗之

私は、今回のカンボジアのプログラムに参加することが決まった際に、貴重なプログラムに参加できることへの期待と同時に、果たしてどのように自分自身がプログラムに貢献できるのか、どのような参加者がいるのか、等々で不安な気持ちもありました。

しかしながら、10月から始まった事前国内研修におけるワークショップ活動を通じて、参加者との積極的な交流や講師陣の方々からの多岐の分野にわたる講義を受ける中で、カンボジアへ行くことが楽しみ一色となりました。

私自身は、インドネシアに会社を設立し、燃料調達に関する事業に取り組んでおりましたので、海外に行くことへの不安はなく、2つの大きな目標を自身で掲げました。

一つ目の目標として、再生可能エネルギー事業や燃料事業、ゴミ処理発電事業など、様々な分野のどれか一つでも事業化したいという個人の目標を立て、もう一つは、プログラムを通じてチームとして活動した中園さんや石橋さんと一緒に一つの事業を成立させたいという目標でした。

実際に1月にカンボジアに行ってみた中では、「百聞は一見に如かず」とはまさにこのことだ、というくらいに刺激たっぷりの日々を過ごすことができました。

初日には、カンボジアで事業を行っている日本人経営者の方や、カンボジア人で日本と交流のある方からも話を聞くことができ、特に CREED の加藤様とは食事会の後もチャットでやり取りをさせて頂き、カンボジアのカシューナッツ殻をバイオ燃料にできないか、という話や、加藤様のお知り合いのマレーシアの方からのバイオ燃料の話をお聞きするなど、今でも関わりを持たせていただいております。すぐに事業化できるお話ではございませんが、こういったご縁を大切に、今後も視野を広く持ち自社の事業の発展に繋げていく所存です。

二日目にはケップ市に移動し、ゴミ処理施設の現地視察を行いました。私たちのチームでは、ゴミの再資源化を大きな目標にしておりましたので、この二日目の視察は非常に重要であり、私自身緊張感をもって現場視察をさせて頂きましたが、やはり、想像以上にゴミの問題が深刻であることを痛感しました。再資源化が当たり前になってきた日本とは違い、まだまだゴミ分別もできていないようなエリアであったため、果たして事業化ができるのか？といった難題にも直面することとなりましたが、我々のチームだけでなく、西さん、石蔵さん、森さんも一緒になって、どうやって再資源化できるのかを真剣に議論できたことによって、時間はかかるかもしれないけども、事業化できる道筋は立てられたのではないかと思います。

そうした点からも、今回は参加者にも恵まれた大変良いプログラムとなりました。

三日目からは、シアヌークビルに移動し、インフォーマル居住区に住む方々との交流

や、普通は絶対に会えないであろう州の副知事とも様々な事業分野での議論ができたことで、私自身のビジネスを考えるうえでの幅が広がり、大変貴重な経験をさせて頂きました。

今回の派遣プログラムにて引率いただいた、成田様、綾部様、熊川様には、私たちが議論に集中できる環境を作っていただいたことに大変感謝をしており、私自身、今回視察したことをビジネスにして社会に貢献することが、恩返しになるという思いで、今はビジネスモデルを構築しているところです。

視察を終えて、私自身掲げた2つの目標の内、個人の目標は近い将来実現できるのでは、と個人的には考えております。

なぜならば、実際にカンボジアで JICA からの補助を受けながら事業をしているトッププランニングという会社と既にカシューナッツ業界で協業できないかの議論を始めており、話が前進しそうだからです。カシューナッツ産業自体もまだカンボジアでは一次産業止まりとなっている部分を、いかに脱却していくか？という課題に共に向き合うこととしており、そのあたりでより具体的な事業化を検討しております。

また、2月の最終発表会でプレゼンさせていただいたように、中園さんの会社と協業で JICA のニーズ確認調査にも申し込みを検討しており、ゴミの再資源化と再生可能エネルギー普及を目指し、今後も事業検討をしまいたします。

最後になりましたが、今回のプログラムに参加できたことに大変感謝しており、半年ほどの短い間でしたが、かけがえのない財産となりました。これからは、このプログラムで培ったことを活かし、海外でも活躍できる人材になっていけるよう日々努力する所存です。

誠にありがとうございました。

令和4年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラムに参加した所感

北九州市立大学大学院環境工学専攻

森 友里歌

カンボジアでの技術展開を企画し、事前研修及び現地視察、事後研修を通じたビジネスプランの提案が求められるこのプログラムにおいて、単なる学生に過ぎない未熟者の自分がカンボジアでいかにビジネスを展開していくかについて画期的なアイデアがだせるかどうか最初自信はなかった。しかし、カンボジアという自分がまだ経験したことのない未知の国で日本の技術を使った社会貢献及び海外事業を展開していくということに興味を勝り、このプログラムに応募し参加する運びとなった。

10月に行われた書類選考、面接審査を通過し幸いにもこのプログラムの参加者として採択いただくことができた。結果としてこの研修を通し発展途上国におけるビジネスモデルや具体的な海外進出事例を学ぶだけではなく、課題解決に向けた行動力やバイタリティなど今後自分がどのような人材となるべきかという意識まで芽生えさせる学びの大きな研修となった。

事前研修ではメンターの先生方からのご講義やカンボジアに関する知識を共有し、個人で制作した事業計画書をもとに参加者が二つのグループに分かれ、共同作業を行いながらまとまったプランを提案していった。私は建築都市の観点から提案を行うグループに配属となり、すでに専門の分野で経営者としてご活躍されている石蔵さん、西さんと共にカンボジアの経済発展に資する持続可能な建築都市を提案するビジョンの設定を行った。

私たちの班では事前国内研修においてカンボジアには建築物や交通、インフラ整備などハードからくる問題がまだ山積みの状態であることに着目した。特に電力供給においては電力料金が近隣諸国より高く、その大半を輸入に頼っていること、道路や鉄道など物流網が未整備であること、他にも人材育成や政治動向の影響が強いことなどがビジネスの成長を阻む要因であることがわかった。しかしカンボジアにはポテンシャルを秘めた部分が多くあり、特に太陽光に適したソーラーポテンシャルの高い地域であること、そして比較的若い世代で構成された人口ピラミッドであり、若い労働力が見込めるポテンシャルであることに焦点を当て、想定されるニーズに対して柔軟な事業計画を3つほど用意し、現地調査へと向かうことにした。

実際に現地調査を行ってみると、想定していたニーズがさほど重要ではないことや、逆に緊急に解決すべき課題など、現地に赴かなければ発見することができなかつたであろう新たな視点を獲得することができた。私を含めた6名の参加者がそれぞれ感じたことについて毎晩振り返りとしてグループミーティングを行ったが、個人的にはこの時間が現場を調査することと同じくらい貴重な経験であったように感じている。メンバーの中には貧困地区の視察において大変なショックを受けている人もいたが、そういった問題に対して冷静な視

点から自分が物事を捉えることができることに自信がついた面もあった。一方で繊細な視点を持ったメンバーの考え方からカンボジアと日本の違いについて鋭く感じるができるセンサーのようなもの、つまりマイナスポイントをプラスに変えていく、ビジネスを行う上でのクリエイティブな発想の根本を学んだことは大きな成果である。

幸福の価値感というものは個人によって異なることを前提に、どうすればカンボジアで暮らす人々にとってメリットが生まれ、そして私たちもビジネスとして成功されられるかを考えていく姿勢をもちながら柔軟な発想と行動力が重要であると感じた。

私自身の将来について具体的なプランを今語ることは出来ないが、将来的に建築都市計画の分野に携わる仕事において社会貢献を行いたいと考えている。建築をつくることは、単なる空間をつくっているのではなく、空間を取り巻く環境、そしてそこで過ごす人々のコミュニティを創出することにつながる。建築がどのようにデザインされているかによって、社会はいかようにも変化すると考えている。私自身はとても些細な存在ではあるが、社会に対する明確なビジョンを持ち、描いたイメージを実現化するための行動を起こす人間であり続けたいと本研修を通し強い意識が芽生えた。

最後になるが、この令和4年度若手技術者・経営者向けの実践型海外派遣プログラムにご支援いただいた関係者の皆様に心からお礼を申し上げますとともに、本研修に参加した所感とさせていただきます。

■ 国内研修の様子



左：国連ハビタットによる講義
右：グループワークセッション

■ 海外派遣（カンボジア）の様子



左：ケップ市との意見交換
右：プレイノップマーケットの水
処理の実態



左：コミュニティの住民との対話
右：インフォーマル居住区に光る
太陽光パネル



左：シアヌークビル州副知事との
意見交換
右：JICA カンボジア事務所訪問

■ 成果報告会の様子

